

令和5年度第6回霞ヶ浦自然観察会実施結果

日 時：令和5年9月16日（土） 9時50分～13時30分

テーマ：妙岐ノ鼻湿原と和田公園で霞ヶ浦の植物を観察しよう

場 所：妙岐ノ鼻及び和田公園（稲敷市浮島）

講 師：松木 礼氏（茅葺屋根工事茅松・茅葺き職人）…シマガヤと茅葺き屋根について

村野光男氏（妙岐ノ鼻茅刈り職人）…妙岐ノ鼻の茅刈りについて

小幡和男（霞ヶ浦環境科学センター任用職員）…妙岐ノ鼻と和田公園の植物の案内

内 容：50haに及ぶ広大な妙岐ノ鼻湿原には、ヨシとともにカモノハシなどのイネ科植物が生育し、シマガヤと呼ばれる良質の茅を生産する茅場でした。茅としての主な植物は、ススキやヨシですが、カモノハシも茅の一種です。妙岐ノ鼻の自然は、茅刈りや野焼きなど人の手が入ることで維持されてきました。そのことが、湿地の植物の多様性を育み、野鳥など動物のすみかを創生します。絶滅危惧種カドハリイは、世界でここだけに生育する希少種で2022年1月に国内希少野生動植物種に指定されました。

また、かつて湖水浴場だった和田公園では、この場所に特徴的に見られるハマヒルガオなどの海浜植物自生し、霞ヶ浦がかつて汽水湖であった名残といえます。

この妙岐ノ鼻湿原と和田公園で植物の観察を行うことで、霞ヶ浦の自然のすばらしさを感じ、同時に抱える問題点を考える機会としました。妙岐ノ鼻では、植物の観察とともに、この場所で唯一の茅刈り職人である村野光男さんと、シマガヤを使って伝統的な茅葺きを行う茅葺き職人の松木礼さんによるレクチャーを行いました。

参加者：25名（大人21名、大学生3名、小学生1名）

担当職員：6名

パートナー：9名

結 果：妙岐ノ鼻の展望広場で開会式を行った後、まず、茅葺き職人松木礼さんのレクチャー、続いて茅刈り職人村野光男さんのレクチャーをいただきました。

レクチャーの後、妙岐ノ鼻の遊歩道沿いに歩きながら、植物の観察を行いました。

妙岐ノ鼻から和田公園に移動して昼食をとり、午後、和田公園と湖畔の植物を観察しました。

当日は残暑が厳しく、熱中症が心配されるような天候でした。講師の先生方、参加者の皆さん、酷暑の中熱心に観察を行っていただき大変ありがとうございました。

講師の先生方のお話、観察した主な植物については以下のとおりです。

《松木さんのお話》

主な茅の種類として、ススキ、ヨシ、稲わら、コムギわら、シマガヤの実物を用意した。一般的に茅というとススキを連想する人が多いと思うが、いろいろな茅があり、それぞれ長所短所をもつ。茅は屋根ふきの材料となるイネ科植物の総称である。シマガヤは日本中でも霞ヶ浦周辺のみで生産され、大変上質な材料である。シマガヤは現在この妙岐ノ鼻と付近の上之島の2か所でしか生産されていなく、量もたいへん限られている。

茅葺屋根は調湿性と保温性に優れ、雨をしのぎ、家の中の湿気を吐き出す、ゴアテックスのような性能をもつ。また、夏涼しく冬は暖かい。

現在茅葺き職人は、日本に200～300人、茨城県に10人くらいいる。伝統的スキルをつないでいくのには危機的な状況である。

《村野さんのお話》

妙岐ノ鼻は、以前約500戸で管理する浮島財産区とよばれ、80ha（現在は50ha）の茅場でシマガヤを生産していた。場所によって質の良し悪しがあるので、数年毎にくじ引きで刈る場所を変えていた。妙岐ノ鼻の中に掘られた堀は舟の通り道で、刈った茅を運んだりすることに使われた。

シマガヤは良質の屋根材で、その耐久性は100年もつといわれる。本当に夏涼しく冬暖かい。周辺の民家はすべてシマガヤで屋根を葺いた。

茅刈りは11月下旬から始まり2月ごろまで続く。茅刈りが終わると「ヤーラモシ」というヨシ焼きを行う。この作業によって、次年は古い茅が混じらない良質の茅の生産ができる。

水門ができて霞ヶ浦の水位が高くなり、シマガヤからヨシに植生が変化してしまい、良質の茅が生産できなくなっていしまった。

《妙岐ノ鼻で観察した主な植物》

ヨシ（イネ科）・・・妙岐ノ鼻で最も優占する植物。穂が出始めている。茅として利用される植物であるが、これが多くなるとシマガヤとしてはよくない。

ウシノシッペイ（イネ科）・・・シマガヤを構成する植物。穂の形がムチに似ているのでこの名がついた。

トダシバ（イネ科）・・・シマガヤを構成する植物。やや乾いた草地に多い。

オギ（イネ科）・・・茅として使われることもあるが、茎が硬いので使いづらい。やや乾いた湿地に生える。妙岐ノ鼻では堤防に近い周辺に少し生える。

ススキ（イネ科）・・・乾いた草地に生える植物で、妙岐ノ鼻では少ない。

シナダレスズメガヤ（イネ科）・・・河川の堤防や道端などにはびこっている外来種。

オオクサキビ（イネ科）・・・攪乱したところに多く出現する。妙岐ノ鼻では歩道周辺にたいへん多い。

ツルマメ（マメ科）・・・つる性の植物で、草原一面を覆ってしまうほど繁殖する。大豆の原種でもある。

ハマスゲ（カヤツリグサ科）・・・攪乱地や道端に多い植物。妙岐ノ鼻で歩道に多い。

イガガヤツリ（カヤツリグサ科）・・・ハマスゲとともに攪乱地や道端に多い植物。

エゾミソハギ（ミソハギ科）・・・秋にきれいな赤紫色の花を咲かせる。お盆にお供えする花。

セイタカアワダチソウ（キク科）・・・やや湿った草地に多い外来種。妙岐ノ鼻では、周辺部には多いが、草原の中ではほとんど見ない。

シロバナサクラタデ（タデ科）・・・秋に白い美しい花を咲かせる。しばしば湿地で一面を覆うほど大きな群落を作ることがある。

シロネ（シソ科）・・・湿地のヨシ原に混じって生える代表的な湿性植物。名前は根が白いことによる。

コバノカモメヅル（キョウチクトウ科）・・・湿地に生えるつる植物。ガガイモと同じように、綿毛のついたタネを散布する。

コガマ（ガマ科）・・・妙岐ノ鼻ではガマ類が生えるような湿地は多くない。

《和田公園で観察した主な植物》

○公園内のクロマツ林で観察

ハマヒルガオ（ヒルガオ科）・・・海岸の砂浜に生える植物。かつて、霞ヶ浦が内海さらに汽水湖であった時代の名残ともいわれる。

ハマエンドウ（マメ科）・・・ハマヒルガオとともに海岸の砂浜に生える植物。和田公園ではこの2種の生育が特徴的である。

○湖岸の砂浜で観察

ワセオバナ（イネ科）・・・海岸の砂浜に生える植物。サトウキビと同属の植物で、根際の茎はかじると甘い。

コウボウシバ（カヤツリグサ科）・・・海岸の砂浜に多い植物。スゲのなかま。

ミズヒマワリ（キク科）・・・霞ヶ浦の湖岸に蔓延している特定外来生物指定種。和田公園の湖岸にも多い。

ナガエツルノゲイトウ（ヒユ科）・・・ミズヒマワリとともに霞ヶ浦の湖岸に蔓延している特定外来生物指定種。ミズヒマワリ、オオバナミズキンバイとともに駆除のターゲットとしている植物。

オオフトバムグラ（アカネ科）・・・海岸や湖岸に多い外来種。最近各地の公園や芝生に増えている。

○水生植物園で観察

ヒレタゴボウ（アカバナ科）・・・湿地に生える外来種。黄色い花が美しく、栽培されたものが野生化した。

マコモ（イネ科）・・・ヨシよりもさらに湿ったところに生える植物。地下茎は柔らかく、ハクチョウのえさになる。

ヒメガマ、ガマ（ガマ科）・・・コガマとともに湿地に生える植物。ヒメガマはしばしば大群落をつくる。

第6回霞ヶ浦自然観察会



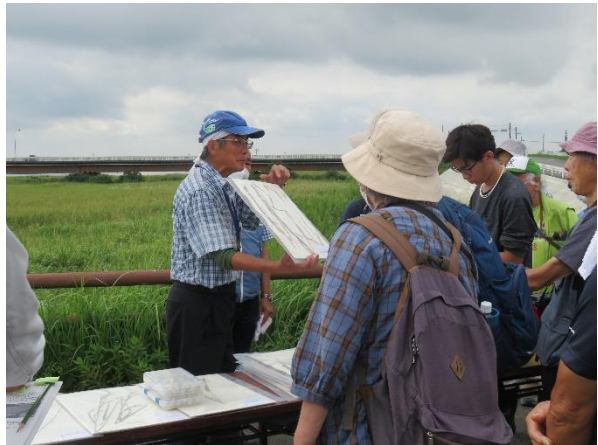
妙岐ノ鼻を見下ろす展望台で開会式



茅のサンプルを使って説明する茅葺き職人松木礼さん



茅刈り職人村野光男さんの説明



妙岐ノ鼻で採集した標本を使って説明する小幡



妙岐ノ鼻の遊歩道で植物を観察する



妙岐ノ鼻一面に生育するヨシ



和田公園で植物を観察する



和田公園を特徴づける植物ハマヒルガオ